

向社会的行動はなぜ中学生になると減少するのか

○若松美沙・倉盛美穂子

(福山市立大学大学院教育学研究科)

問題と目的

子どもの数は37年連続減少する一方で、いじめや不登校等の生徒指導上の諸課題は増加傾向にある(総務省統計局, 2018; 文部科学省, 2018)。人と人がつながりにくい子どもの生活世界があるのではないかと。他者と調和のとれた関係性を保ち(Schwartz & Bardi, 2001; Padilla-Walker & Carlo, 2014; Davidov et al., 2016)、他者の利益を意図した行動である向社会的行動(Eisenberg, Fabes & Spinrad 2006)は、小学校中学年から高学年にかけて増加し、中学生になると減少するという知見がある(Eisenberg et al., 1999; Carlo et al., 2007; Bergin, 2014; 二宮, 2010; 村上・西村・櫻井, 2016)。5~13歳を対象に向社会的行動の発達の変化を調べたWeller & Lagattuta (2013, 2014)は、年齢が高くなるにつれて、状況に応じた向社会的な判断が可能になると述べている。

そこで、本研究では、我が国においても、中学生は、被援助者の状況や被援助者との親密性に応じた判断が可能になると仮説を立て、場面想起法による実験を用いて検討した。向社会的行動が中学生になると減少する理由や背景を、向社会的判断の発達レベル(宗方・二宮, 1985; Eisenberg et al., 1987; 伊藤, 2004)の次元から検討した。

方法

対象 公立中学2年生176名 男94名, 女82名
手続き 調査で取り上げた場面は、中学校教師19名が学校生活でよくあると判断し、援助者である主人公と被援助者である友達が登場する場面である。被援助者の困窮度の程度が3レベル(高・中・低)、さらに、被援助者との親密性が高い場合(仲良し)と、低い場合(顔見知り)を設定した。

「被援助者の困窮度が高い場面」は、学校での休憩時間に、松葉杖を使っている被援助者が階段でつまづく場面(松葉杖の場面)、「被援助者の困窮度が中程度の場面」は、美術の時間に、被援助者の作品が思うように作れない場面(作品の場面)、「被援助者の困窮度が低い場面」は、朝の支度の時間に、被援助者の荷物が床に落ちる場面(荷物の場面)である。被験者と援助者、および被援助者は同性とし、男女2種類のイラストを用意した。被験者には、場面を提示後、判断の決定(援助しない、援助する)と判断の理由(自由記述)について回答を求めた。

結果と考察

判断の決定 Table 1は、困窮度が高い「松葉杖の場面」と困窮度が中程度の「作品の場面」、困窮度が低い「荷物の場面」で、被験者176人のうち、

援助しないと判断した回答人数とその割合を示したものである。被援助者との親密性が高い場合(仲良し)と、低い場合(顔見知り)ごとに、各場面間で、援助しないと判断した人数の割合に偏りがあるかを検討するため、コクランのQ検定を行ったところ、有意差がみられた(仲良し $Q_{(2)}=45.10, p<.001$; 顔見知り $Q_{(2)}=71.54, p<.001$)。ライアン法による多重比較の結果、被援助者と仲良しの場合も顔見知りの場合も、援助しないと判断した人数の割合は、困窮度が高い場面・低い場面よりも、中程度の場面で多かった。

援助しないと判断が被援助者の困窮度によって異なる背景を検討するために、援助しないと判断の理由に着目する。

Table 1 援助しないと回答した人数
(176人を母数としたときの割合)

困窮度	高	中	低
仲良し	13(7.36%)	47(26.70%)	9(5.11%)
顔見知り	30(17.05%)	90(51.14%)	31(17.61%)

判断の理由 援助しない理由を、向社会的判断の発達レベル(Eisenberg et al., 1987)の観点から分類した。その結果、困窮度の3つのレベル(高・中・低)や被援助者との親密性(高低)に関わらず、レベルIへ多数の回答が分類された。困窮別に見てみると、レベルI以外の回答は、困窮度が高い場面では、被援助者と仲良しの場合は43%、顔見知りの場合は36%、困窮度が中程度の場面では、仲良しの場合は34%、顔見知りの場合は17%、困窮度が低い場面では、仲良しの場合は8%、顔見知りの場合は8%であった。特に、困窮度が高い場面では、レベルV(仲良し32%、顔見知り25%)の回答、困窮度が中程度の場面では、レベルV(仲良し16%、顔見知り6%)やIVb(仲良し11%、顔見知り5%)の回答がみられた。

研究のまとめ

本研究の目的は、向社会的行動が中学生になると減少する理由や背景を検討することであった。

中学生が援助しない判断が生じやすいのは、被援助者の困窮度が中程度の場面であった。また、被援助者の困窮度が中程度の場面では、援助しない理由の大半は、向社会的判断の発達レベルIであったが、V「強く内在化された段階」やIVb「移行段階」の回答もみられた。援助しない判断の決定に、被援助者との親密性の影響はみられなかった。